

IRの現状と課題

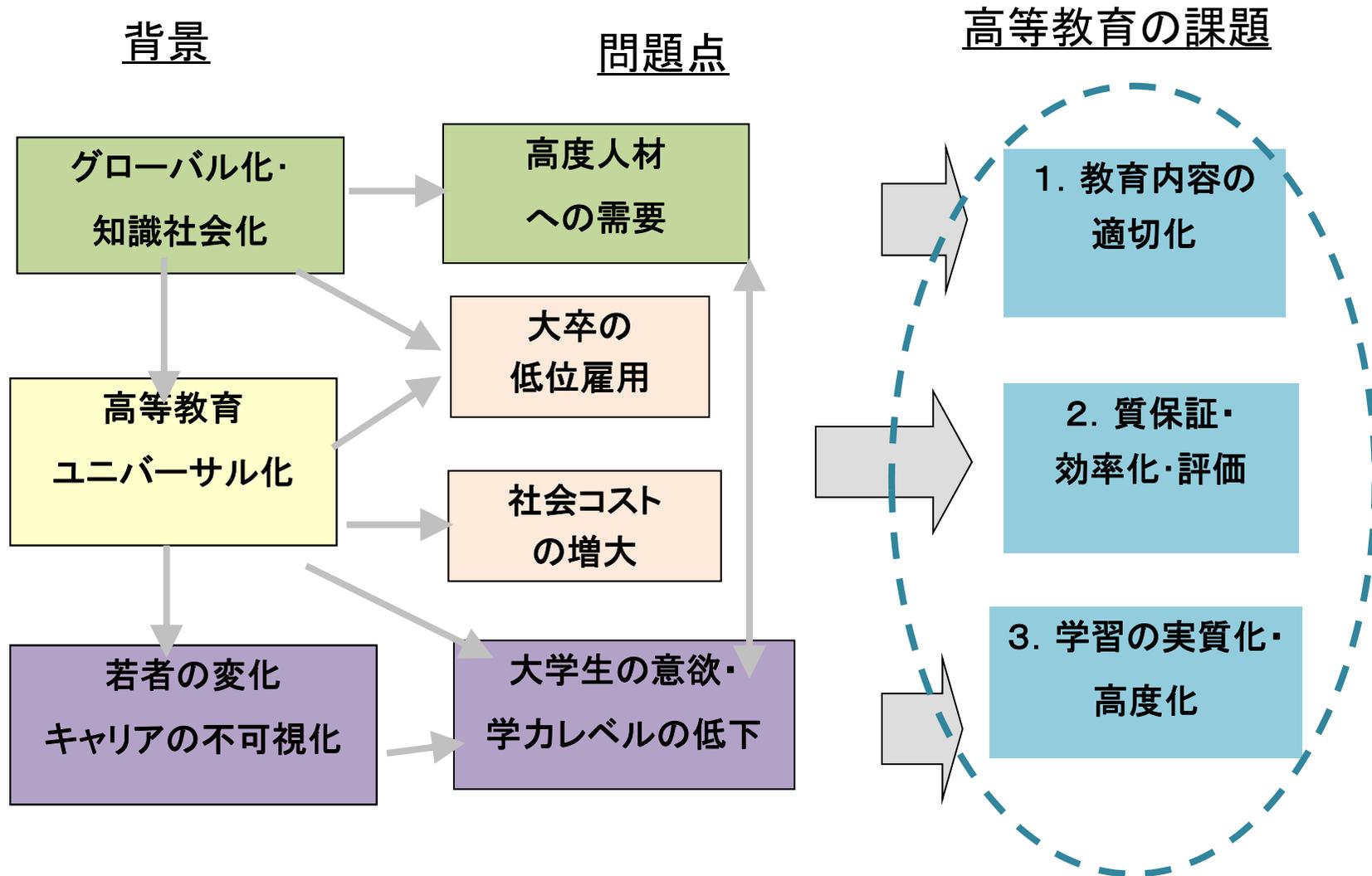
金子元久

私立大学情報教育協会 教育改革ICT戦略大会
2016年9月7日

高等教育改革の構図

- 大学の現実
 - － ユニバーサル化
 - － 就職問題
- 経済社会
 - － グローバル化
 - － 産業構造の変化 人材需要の変質
 - － 財政緊縮
- 社会の多様化・流動化
 - － 若者の変化

量から質への転換



質的転換への道

- 社会の視点
 - 質保証 多様な質の保証
 - 大学に関する情報
 - 市場の機能
- 大学組織の視点
 - 組織としての質の向上
 - 効率的な資源配分
- 教育の視点
 - 教育内容・方法
 - 学生の学修
 - 教育効果



目次

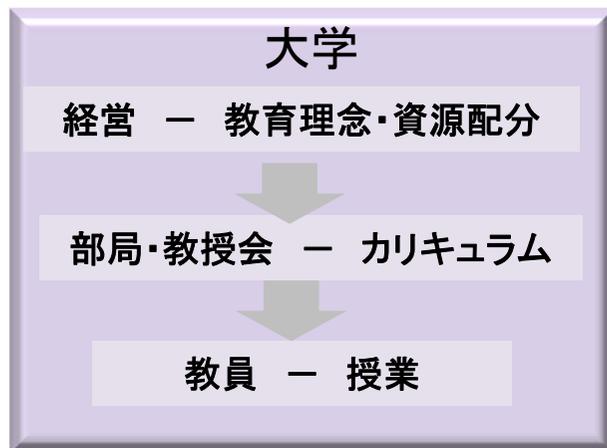
- ▶ 1. IRとはなにか
- 2. 教育のデータ分析
- 3. 役割と課題

大学教育の成り立ち

- ①教育・学習行動
 - インプット:どのような授業が行われているか
 - プロセス:それが学生の学習行動を起こしているか
 - アウトカム:結果として何を学生は獲得しているか

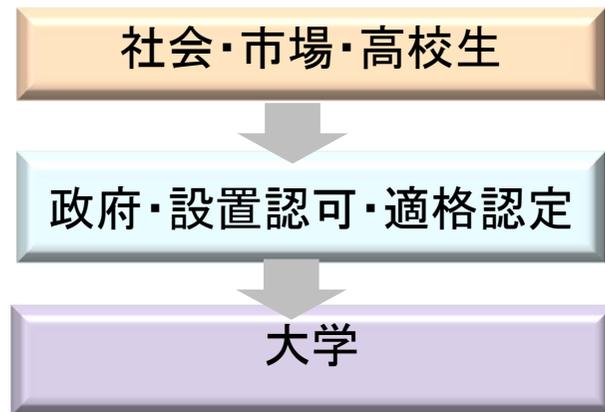


-
- ② 大学組織： ガバナンス、資源配分
 - 大学はどのような意思決定・資源配分をおこなっているか
 - どのようにカリキュラム、授業をするか

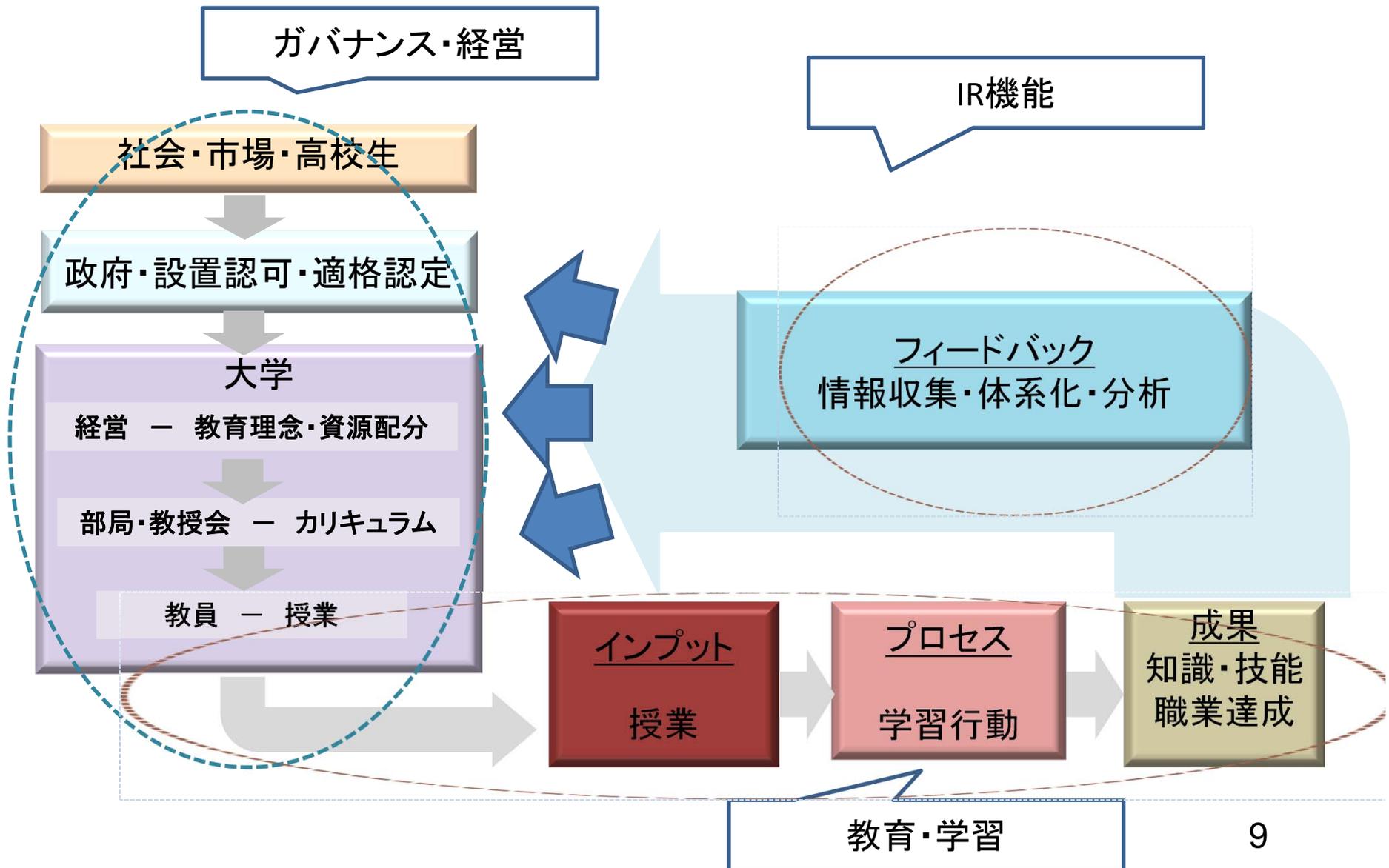


- ③政府・社会

- 大学教育の質を、政府はどう保証するか
- 消費者(高校生、親)は大学をどう選択するか
- そのために必要な情報が提供されているか



三つを結び付けるもの



IRの機能

- ①情報収集
 - 独自調査
 - 学内各所に蓄積されている各種データの確認
 - 学生データ
 - 入試、教務(単位取得)、卒業・退学、就職
 - 教務データ
 - カリキュラム・授業数、授業規模
 - どれだけの授業数が、どのレベルで必要か
 - 供給: 教員数 \times 一人当たり授業数 \times 受講学生数
 - 需要: 学生数 \times 必要単位数

- ②整理・体系化・分析

- 学修行動の分析

- 学内データの連結、データベース化

- 他大学とのベンチマーキング

- コスト 一人あたり教育単価の計算

- ③学内外へのフィードバック

- 評価・分析、報告書の作成

- 認証評価などへの対応

- 学外への情報公開、広報

- 学内への情報提供

- FD

- SD



目次

1. IRとはなにか
- ▶ 2. 教育のデータ分析
3. 役割と課題

学習行動の把握

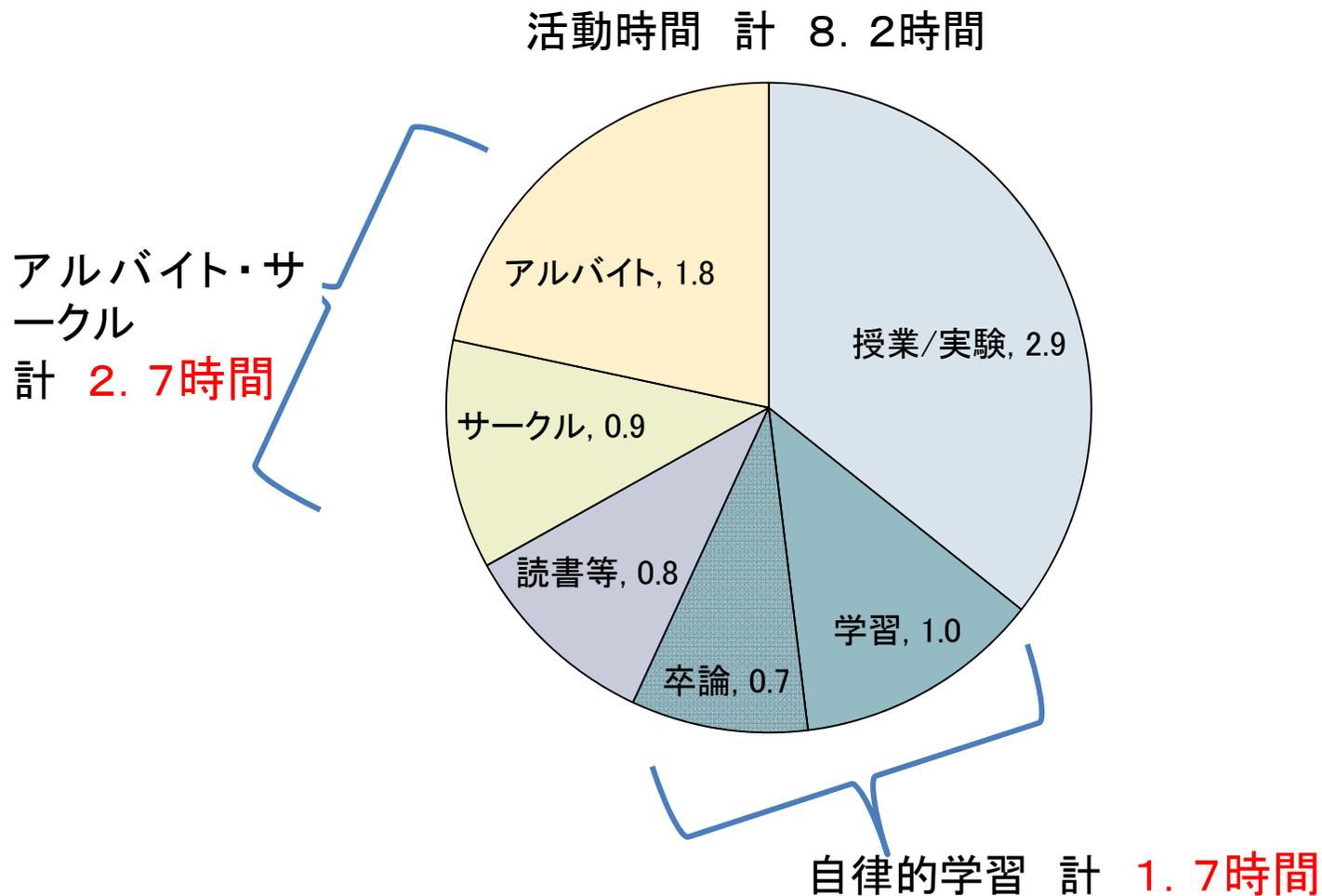
- 学生調査

- 学生がどのように学習し、どのように反応しているかを調査
 - 日本の例、金子グループ、山田グループ、各大学独自調査
 - 国立教育研究所が全国調査を試行
 - どのように活用するかが課題

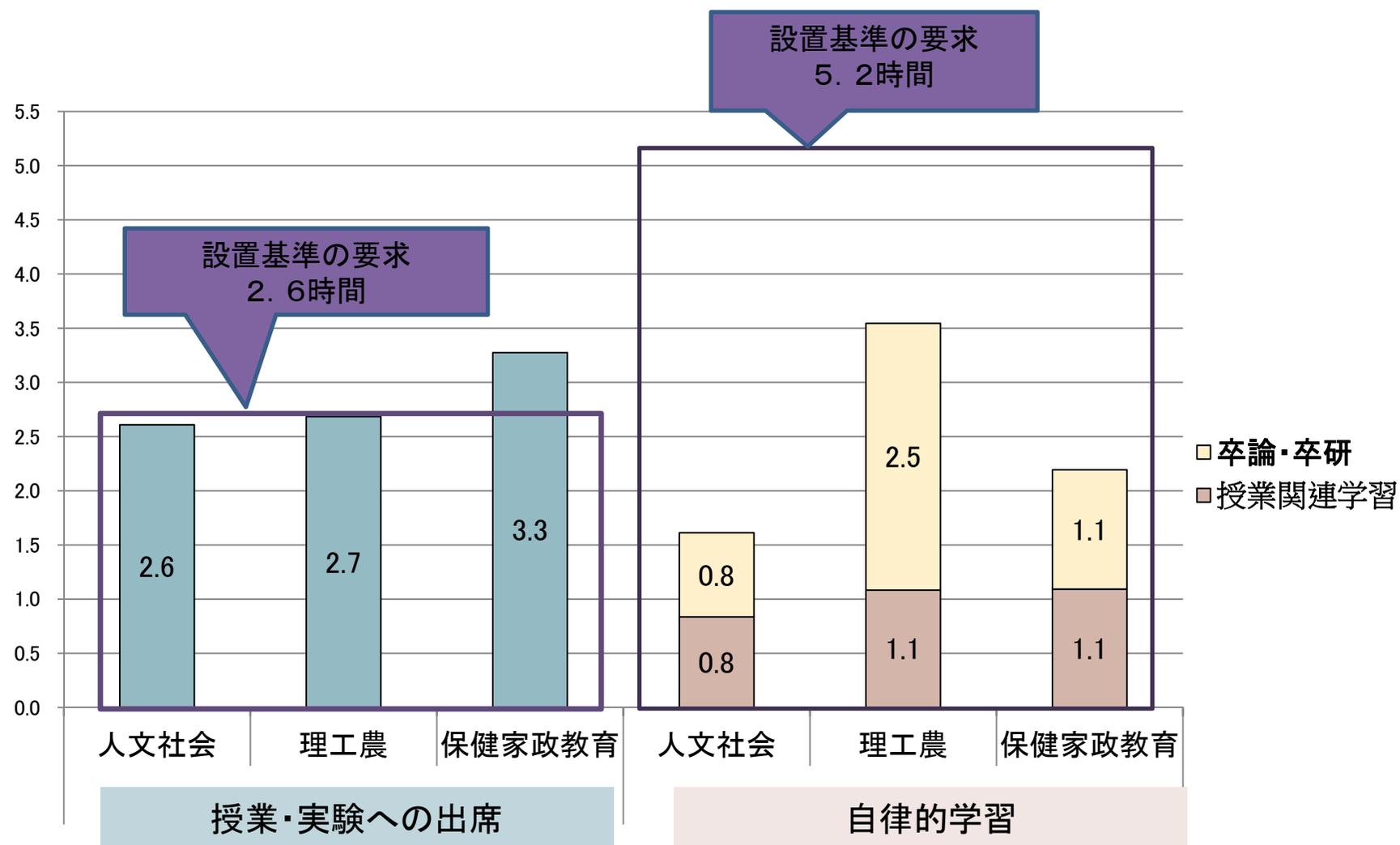
- 既存学生データの統合

- 入試、授業出席・成績、卒業・就職状況
- 各担当課で、独自にデータをもっている
 - これを連結することによって、学生の問題を把握
- 直接の利用
 - リスク学生の把握、入試改革への利用
 - E-ポートレート(学生の成長記録)

日本の学生の学習時間

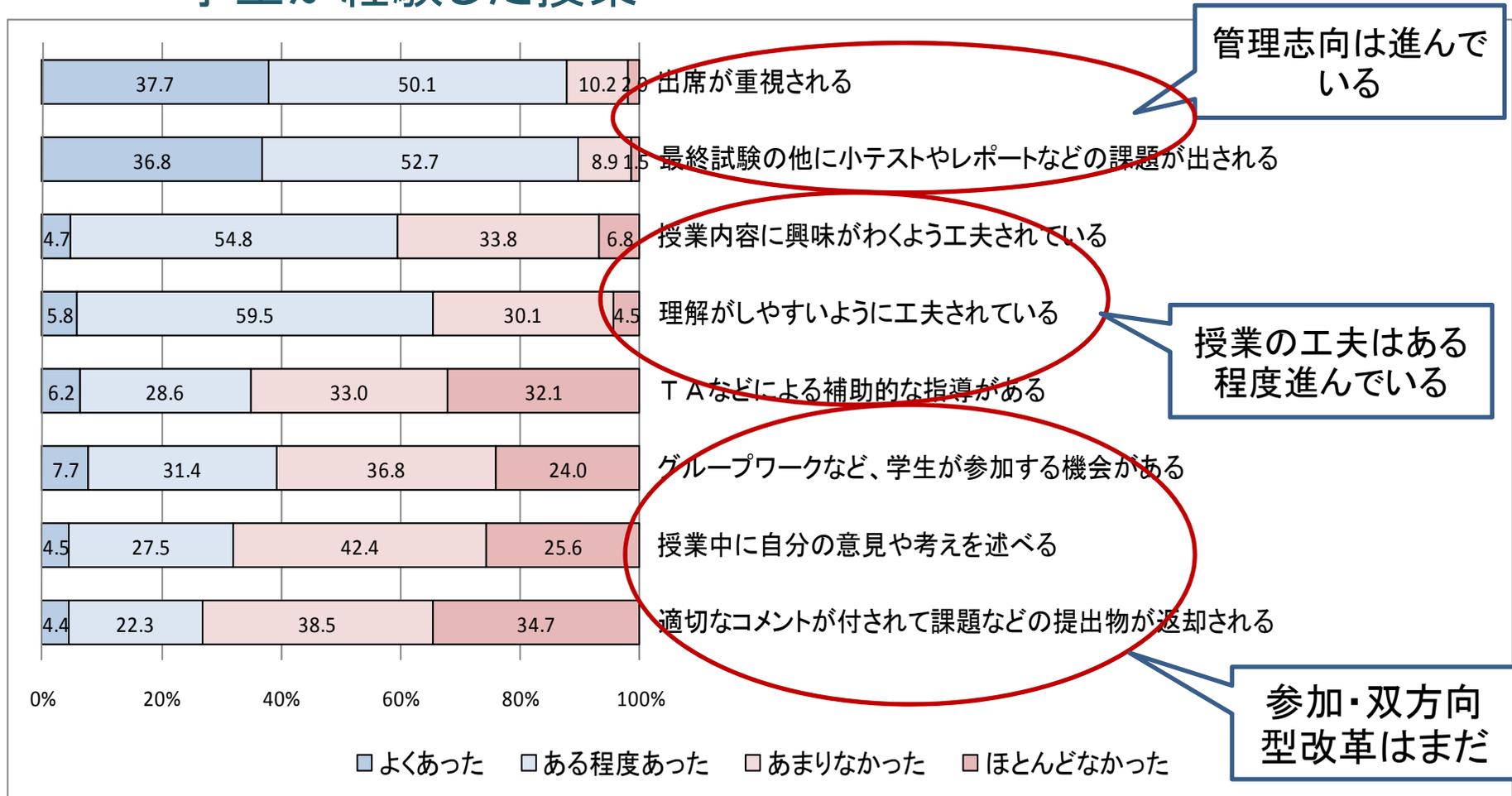


自律的な学習時間が不足



授業方法の改革 — 現状

— 学生が経験した授業



- 教育 → 学習行動

- 一定の授業方法は、学習時間にプラスの影響

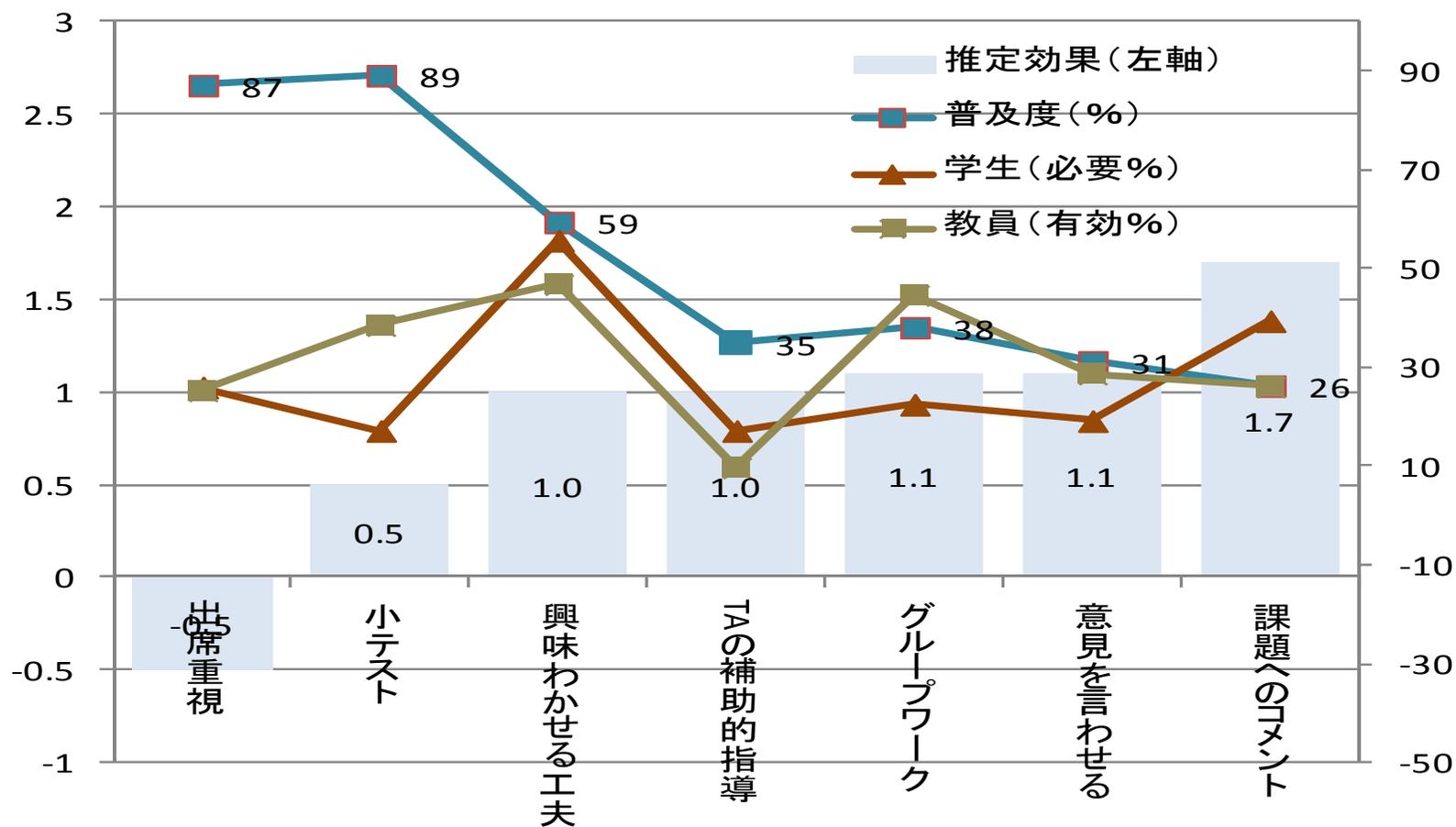
- 授業タイプと、授業に関連した学習時間との関係

		学生タイプ			
授業方法		高同調	独立	受容	疎外
統制	出席重視	-0.7		-0.7	
	小テスト・レポート	0.4	0.5	0.6	
誘導	理解しやすい工夫	0.7	0.3	0.4	0.6
	興味わく工夫	0.9	0.4	0.7	0.8
	TAなどの補助	1.1	0.8	0.9	1.0
参加	グループワーク	0.9	0.7	0.9	1.4
	授業中に意見を述べる	1.1	0.9	0.7	1.2
	課題へのコメント	1.8	1.4	1.2	1.6

参加型授業はプラスの効果
疎外型にも有効

回帰係数(標準化、%) 有意率99%以上のみ表示。
出所:CRUMP 全国大学生調査から算出

教員・学生の意識と、授業効果とのギャップ



学生調査から見えること

- 授業のあり方には改善の余地がある
 - 一定の授業方法は学習時間を増やす
 - 教員の考え方とはギャップがある
 - 教員にこうした結果を知らせることには意味がある
- 大学によって違いがある
 - 規模や、選抜性によって必ずしも規定されない
 - 大学独自の努力に意味がある
- 個々の大学での調査・分析が重要



目次

1. IRとはなにか
2. 教育のデータ分析
- ▶ 3. 役割と課題

①情報開示、アカウントビリティ

- 社会に対する情報開示
 - － 大学広報
 - － 各種調査に対する回答
- 政府・適格認定に関する基本情報の作成
 - － アメリカでは大きな要因、日本ではまだ少ない
 - － しかし日本でも本格化する
 - 「大学ポートレート」
 - － 現状では骨抜き。しかし拡充される可能性がある
 - 適格認定(認証評価)における基本情報の要求
 - － これから拡大される可能性
 - 設置基準の大綱化・改訂
 - － 詳細情報の要求につながる可能性がある

②経営・資源配分の基礎

- 基本的な経営判断
 - これまで、大学間の差異は少ない
 - 基本は授業料維持による学生確保
 - 一部で、学部改組による規模拡大
 - これからの選択肢
 - A.改組・拡大路線の延長 — それによる資金獲得、施設拡大
 - B.質路線 — 学生数を縮小、授業料は拡大、質を売り物にする
 - C.選択的縮小 — 集客力の弱い大学
- 私学の選択
 - A,B,Cの路線が分かれる
 - それが競争環境の中で試される。
 - IRの情報はきわめて重要な基礎

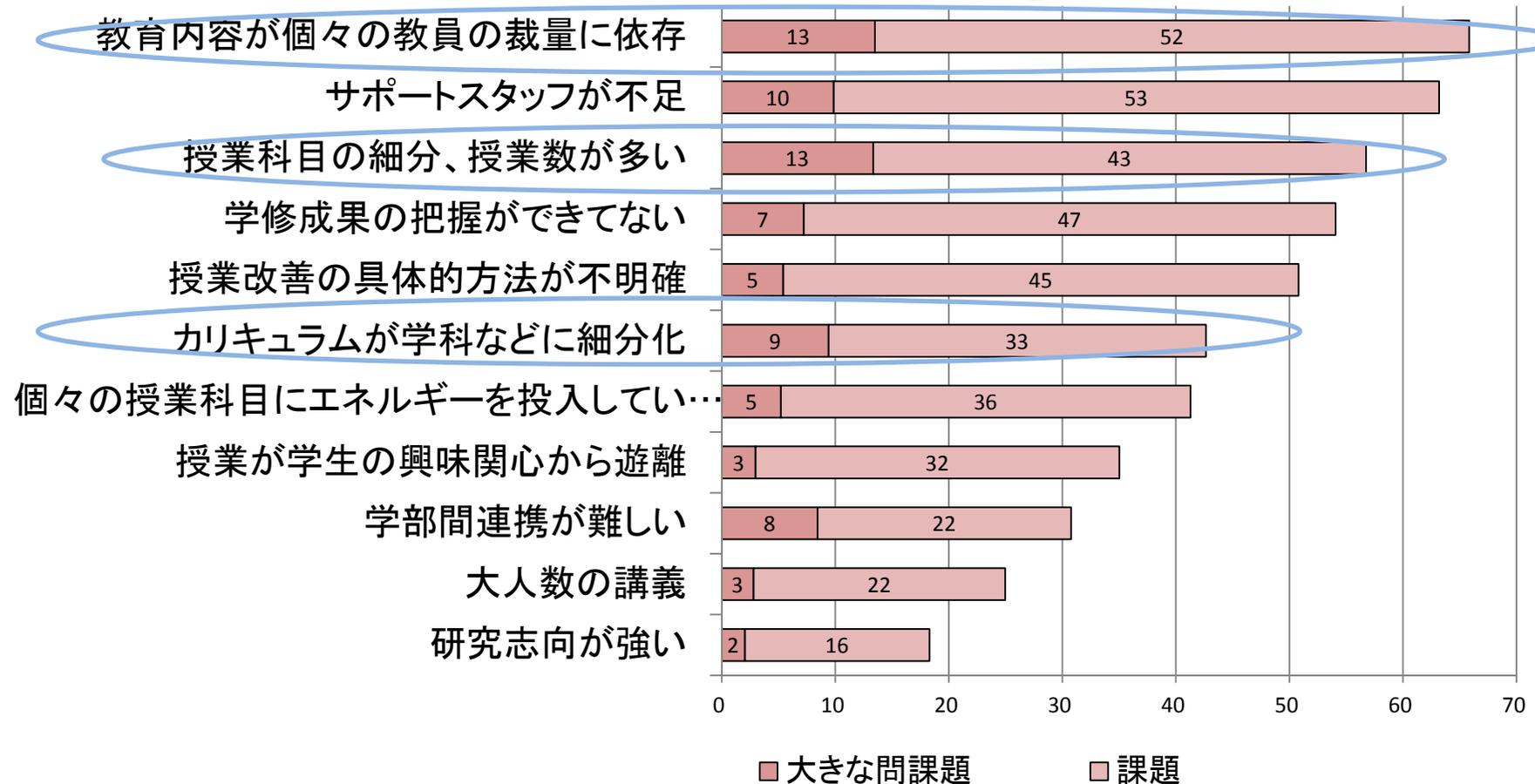
③学内合意の形成

- 大学教育改革には、学内合意の形成が最も重要
 - 実際に授業を担当する教員
 - その教育の意味を内面化する学生
 - 理念を設定し、必要な投資を行う経営者
- しかしそれは実態は難しい
 - 「建学の理念」は抽象的、
 - 多くの「教育ミッション」は抽象的にしかかけない
 - 多くの教員は、独自の教育観をもっている
- 説得するためには、事実に立脚した議論が必要

学長の考える問題点

● 学長の考える「授業改善の障害」

体系化、標準化、広域化が必要

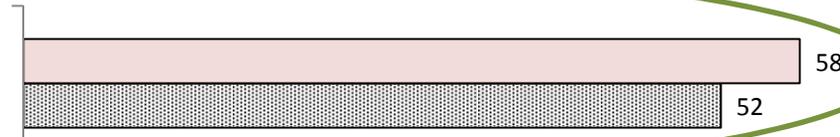


教員とのギャップ

教員が力を入れているもの

人的な接触に重点

研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する



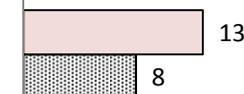
コミュニケーション能力など、授業で獲得すべき基礎能力を明確にする



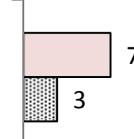
修得すべき知識を標準化し、それに応じてカリキュラムを体系化する



週2回の授業などを通じて、学生が個々の授業科目に集中できるようにする



少人数の授業を増やすよりも、授業内容、教材などを標準化し、TAなどを組織的に用いる



非常に重要

力を入れている

標準化・体系化は支持しない

N=5,192

出所: 金子元久『大学教育の再構築』2013 26

経営と教員とのギャップ

- 教員の意識
 - 学生となるべく人的な接触をもつことが必要
 - そのためには大規模授業は必要悪
 - 人的な接触が、汎用能力を作る
- 学長・経営レベル
 - 大学と社会の要求がかい離
 - 現在の授業は、個々の教員の主観的な判断に任せすぎ
 - 大学全体として、社会の要求にこたえる教育を作る
- このギャップをこえて、合意を形成することが必要
 - そのためにはデータが不可欠

IRの課題(1)学内での位置づけ

- 学内での地位は不安定
 - 情報公開、適格認定への対応の業務はまだ少ない
 - 大学経営トップが変わると、サポートは必ずしもない
 - 大学経営の課題設定が重要
- 部局の権限との関係
 - 大学教育の責任部局は「学部」
 - 全学IR組織は、学部の権限に足を突っ込むことになる
- 教員との関係
 - 多くの教員は無関心
 - IRは、大学の問題点を指摘することが仕事

IRの課題(2)学内・大学間連携

- 学内連携
 - IR専門組織が必ずしも大きくなる必要はない
 - 学内の組織と連携して、バーチャルなIR組織を作ることも可能
- 大学間連携
 - 情報の交換の条件は微妙
 - しかしベンチマーキングによる分析のメリットは大きい
- 汎大学連携
 - 学会、コンソーシアムなどでの経験交流
 - 学内での地位の補強にもなる

IRの課題(3) 理論・人的・組織的基礎

- 技術的蓄積が必要
 - － 調査手法、分析、データベース
- 組織
 - － 必ずしも単一のIR部門とする必要はない
 - － どのような形態が効率的か
- だれがIRを担うか
 - － 職員
 - 専門職化するか否か
 - － 専門職 —
 - 研究職・教員の採用が現実には多い
 - しかし処遇・キャリアに問題
 - 業務内容が明確でない

IRの基本

- 基本的な考え方
 - これまで、大学教育は一人ひとりの教員の責任
 - これから、大学全体の組織的な努力が必要
- 戦略的な改革の必要
 - すべてに大学に共通の「理想モデル」はない
 - それぞれの大学独自の条件に根ざしたモデルを探求する
- そのために必要なこと
 - 理念ではなく、何が実際に行われているかを把握する
 - その結果を、まとめて、学内外に伝える
 - そこから新しい行動と理念を生む

ご意見・ご質問をどうぞ

